

## 『翻訳満語纂編』の見出し満洲語について

松岡, 雄太  
長崎外国語大学

<https://doi.org/10.15017/1518728>

---

出版情報：九州大学言語学論集. 35, pp.330-347, 2015. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室  
バージョン：  
権利関係：



# 『翻訳満語纂編』の見出し満洲語について

松岡 雄太  
(長崎外国語大学)

matsuoka@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp

キーワード：長崎唐通事、『翻訳満語纂編』、満洲語

## 1. はじめに

『翻訳満語纂編』(5巻10冊)は『清文鑑和解(翻訳清文鑑)』(4巻5冊)と共に19世紀半ばに長崎唐通事が編纂した満洲語辞典であり<sup>1</sup>、その底本は共に『御製増訂清文鑑』(以下、『清文鑑』と表記)である。『清文鑑和解(翻訳清文鑑)』は『清文鑑』の巻一から巻四までをほぼ忠実に翻訳したものであるが、『翻訳満語纂編』は『清文鑑』の補編を除く全32巻から2,632語を訳出し、さらに満洲語語句を十二字頭順に配列し直したものである<sup>2</sup>。『翻訳満語纂編』も『清文鑑和解(翻訳清文鑑)』も辞書としての構成は同一である。すなわち、まず見出しとなる満洲語の語句が載せられ、語句の右側にはかなによる満洲文字の読み方がふされている。見出し満洲語の下にはそれに対応する漢語、漢語の下には満洲語による語釈、語釈の右側にはその語釈の日本語訳がふされている<sup>3</sup>。

本論文では、この『翻訳満語纂編』を対象として、その見出しの満洲語語句に見られる特徴について考察する<sup>4</sup>。以下、2章では見出し満洲語のつづり字について、3章では『清文鑑』に求められない語句の存在について述べる。

---

<sup>1</sup> これらの文献は共に現在は長崎歴史文化博物館所蔵。文献番号は『翻訳満語纂編』が「12/1-2/1~10」、『清文鑑和解(翻訳清文鑑)』が「12/2-2/1~5」である。『翻訳満語纂編』の書誌情報は上原(1971: 13-14)及び赤峯(1989, 1990, 1991)に、『清文鑑和解(翻訳清文鑑)』の書誌情報は上原(1971: 23)に詳しい。

<sup>2</sup> 『翻訳満語纂編』と『清文鑑和解(翻訳清文鑑)』の編纂過程については松岡(2013a)を参照のこと。

<sup>3</sup> 見出し満洲語の右側にふされたかな表記については松岡(2013b)を、満洲語の語釈の右側にふされた日本語訳については赤峯(1989, 1990, 1991)を参照のこと。

<sup>4</sup> この2,632語をどのような基準によって選抜したかの議論については松岡(2013c)を参照のこと。

## 2. 見出し満洲語のつづり字の誤り

見出し満洲語語句にはつづりを誤った例が散見する。つづり字の誤りの中には、『清文鑑』から書写する際に単に見誤ったと思われるものから、満洲文字に対する理解不足が原因と思われるものがある。後者は唐通事の満洲語能力がどの程度であったか、その一端を表していると考えられる。なお、本章で以下に挙げる例は、管見の限り、『翻訳満語纂編』における見出し満洲語のつづり字における全ての誤表記例である。また、結論からいえば、『翻訳満語纂編』に見られる満洲語のつづり字の誤りは、その大部分が現在であっても、満洲語の初学者がよく犯しがちなものである。

### 2.1. 圈点の有無に関する誤り

まず、以下の(1)~(7)は満洲文字の圈点を見落とししたか、その仕組みを理解できなかったために生じたと考えられる誤表記例である。以下の(1)は「e」を「a」と見誤って表記した例である。

#### (1) 「a」と「e」の混同

- (a) pelarjemi (pelarjemi) ベエラアレチエモピイ [巻1上:30b:石寄親之]<sup>5</sup>
- (b) tuwalembi (tuwelembi) ツウワアレエモ□イ<sup>6</sup> [巻1下:2a:潁川春重]
- (c) dahabura (dahabure) gisun tucimbi タアハアプウルエ カイスウム ツウツイモピイ [巻2上:44b:彭城廣林]
- (d) jušempa (jušempe) ウシエモバア [巻5下:20a:蔡正邦]
- (e) efulambi (efulembi) エ<sup>○</sup>フウレエモピイ [巻3上:7a:呉為祥]

注目すべきは全て「e」とすべきところが「a」となっている点である。満洲語だけを見ていれば、その原因は圈点のつけ忘れだと考えられるが、満洲語にふされた満洲語の読み方を表すためのかな表記を見てみると、(1a)~(1d)は満洲語に付されたかな表記が「a」を表すための文字になっているのに対して、(1e)は「e」を表すための文字になっている。つまり、(1e)を翻訳した呉為祥は、この満洲語が「efulembi」であることを知っていて、単に満洲語の「la」の右横に圈点を打ち忘れたのだと考えられるが、(1a)~(1d)を翻訳した者はかな文字を表記する以前にこの満洲語のつづり字を勘違いしていることになる。

<sup>5</sup> 用例の右側にある括弧内の表記が予測される正しい語形である。また、引用する際はその例が現れる箇所と共にその例の翻訳を担当した唐通事の名前を挙げている。『翻訳満語纂編』の編纂に関わった唐通事については松岡 (2013a, b, c) を参照のこと。

<sup>6</sup> かな表記における「□」は虫食いなどにより判別が困難な箇所を表している。

なお、上記の語句の満洲語の語釈部分がどのようにになっているかを示すと、以下の通りである。

(1) (1)の満洲語による語釈

(a) julhū tatame morin -i angga sula balai tukiwere be **pelarjembī** sembi.

扯手 拉 馬 ノ 口 散 妄ニ 揚 ヲ 嘴飄 ト云フ

(b) ubade uđafi tubade uncara be, **tuwalem(bi)** sembi.

此處 質 彼處 質 ヲ 販賣 ト云

(c) dergi hafan ini fejergi hafasai wesire for(go)šoro jergi baita de niyalma antaka,

上 官 他 下 官等ノ 陞 轉 等ノ 事 ニ 人ノ 何如

baita antaka babe tucibume simnere gisun nikebufi wesimbure be,

事ノ 何如 處ヲ 出テ 考 語ヲ 著 奏スル ヲ

**dahabure** gisun tucimbi sembi

出具考語ト 云フ

(d) bigan i sogi, amtan jušuhun, soroko manggi den dui sunja jušuro[sic. jušuru]

野菜 味ヒ 酸シ 黄 バ 高サ 四 五 尺ニ

ombi, use mere -i adali.

成ル 籽粒ハ蕎麥ノ 同シ

(e) hafan tušan ci fohali[sic. fuhali] nakabure be, **efulembi** sembi.

官 職ヨリ 全然 退 ヲ 革職ト 云フ

(1d)は語釈中に見出し語である「jušempe」が出てこない。それゆえ、このような語句の見出し語を結局のところ唐通事がどのように理解していたのか判断を下すのは困難である。しかし上記の場合、(1d)以外は見出し語が語釈の中にも現れている。(1a), (1b)は(1a), (1b)同様の誤った表記がなされているので、唐通事はこの語を間違って理解していた可能性が高い。一方で、(1c)と(1e)は見出し語は間違っているものの、語釈の満洲語は正しく表記されている。つまり、これらの語句は正しく理解していたものの見出し語においてのみ圈点をつけ損ねてしまった可能性が高いと考えられる。(1), (1)に関していえば、この相関関係は満洲文字のかな表記とも平行的になっており、上記の可能性が高いことを示唆している。本論文では以下の例においても同様に、見出し語の満洲語表記と語釈の満洲語表記が一致するかどうかについて言及しはするが、紙面の関係上、語釈の全文を載せることは控える<sup>7</sup>。結論から言えば、(1), (1)のように語釈

<sup>7</sup> 以下、(1c), (1e)のように見出し語のつづり字が誤っていても語釈中で正しく表記され

の満洲語の正誤とかな表記の正誤の関係は平行的にならない場合もある。  
次に、(2)は「o」と「u」を混同した例である。

(2) 「o」と「u」の混同

- (a) misuro (misuru) ミイスウルウ [巻2下:13a:蘆塚恒徳] (○)
- (b) galai sojakū (sujakū) カアラア井 ソオチアケウ [巻4上:13a:彭城永祥] (○)
- (c) nicuhe (nicuhe) ニイツオハエ [巻1上:17b:高尾延之] (ー)
- (d) nicuhe ŝongkeri (ŝungkeri) ilha ニイツウハエ シウンケエルイ イレ[sic.ル]ハア [巻5上:15b:蘆塚恒徳] (ー)
- (e) lafu sugi (sogi) ラアフウ スウカイ [巻4下:11a:官梅盛芳] (ー)

(2a)~(2d)は「u」とすべきところを「o」としている例である。かな表記は全て「o」のものになっているので、語句の正確なつづり字は知っていたが、単に圈点をつけ忘れたものと思われる。その証拠に(2a), (2b)における語釈の満洲語は正しく表記されている<sup>8</sup>。(2e)は逆に「o」とすべきところを「u」としている例である。すなわち、必要のない箇所に点をつけてしまっている。かな表記も「u」のものになっているので、完全に「sogi」という語自体を理解できていなかったことになる。

(3)は「t」と「d」を混同した例である。

(3) 「t」と「d」の混同

- (a) jebele tashūwan (dashūwan) -i fiyenten チエペエレエ ダアスハウワム ニフイエムデム [巻1下:20b:彭城雅美] (○)
- (b) imenggi tabukū (dabukū) イメエンカイ ダアプウケウ [巻3上:12a:官梅盛芳] (○)
- (c) tohoma -i taldakū (daldakū) ドオハオマア イ ダアルタアケウ [巻1上:48b:彭城種美] (×)
- (d) jugūn giyai be katalara (kadalarā) tingkin -i hafan チウカウム カイヤア井 ペエ ケアダアラアルア デインケイム ニ ハアフアム

---

ている場合は「○」、(1a), (1b)のように見出し語のつづり字と同様の誤りが語釈中でなされている場合は「×」、(1d)のように見出し語が語釈中に出てこない場合は「ー」と表記する。

<sup>8</sup> ただし、(2a)の「misuru」は語釈中では「misru」と書かれており、「ru」の部分は正しいが、見出し語では正しく表記できていた「su」の部分の母音「u」が抜け落ちている。

- [卷 1 下:23a:彭城雅美] (×)
- (e) sahatambi (sahadambi) サアハア ダアモピイ [卷 2 上:32a:穎川重春] (×)
- (f) wesimbure buktari (bukdari) ワエシイモプウルエ フ[sic.プ]ウ□ダアレイ  
[卷 5 下: 39a:彭城種美] (×)
- (g) latu (ladu) ラアヅウ [卷 5 下:7a:彭城昌宜] (×)
- (h) garutangga (garudangga) sejen カアル□ダ□□カア セエチエム  
[卷 2 上:16b:高尾延之] (一)
- (i) sacikū sirtan (sirdan) サアツイケウ シイレタアム  
[卷 5 上:27a:官梅盛芳] (○)
- (j) muke tendere (dendere) tampin ムウケエ テエムテエルエ ダアモビイム  
[卷 1 下:15b:穎川衛香] (○)
- (k) samati (samadi) boo サアマアチイ [卷 1 上:32b:石寄親之] (×)
- (l) nimata (Nimadi) ニイマアタア [卷 3 上:20b:神代定光] (一)

注目すべきは全て「d」とすべきところを「t」にしている点である。その逆はない。単純に見れば全て圈点のつけ忘れということになるが、(3a)~(3h)はかな表記が「t」を表すためのものになっている。一方で(3i)~(3l)のかな表記は「d」を表すための文字である。半数くらいの者がかな表記以前に単語のつづり自体を誤っていたことが分かる。なお、(3k)は見出し語が誤っており、語釈の満洲語表記も見出し語同様に誤っているのに、かな表記だけはなぜか正しいという奇妙な例である。

(4)は「k」と「g」を混同した例である。

(4) 「k」と「g」の混同

- (a) garudangga yengkuhe (yengguhe) カアルウタアンカア エエンケウハエ  
[卷 2 上:16b:高尾延之] (○)
- (b) šukin (šugin) dosimbuha iletu kiyoo シイケイム トオシイモプウハア イレ  
エヅウ ケイヨオウ [卷 4 上:34a:早野志明] (○)
- (c) kame kisurembi (gisurembi) ケアメエ カイスウルエモピイ  
[卷 3 上:24b:石崎親之] (○)
- (d) šajingga kasha (gasha) シアチインカア ケアスハア  
[卷 1 上:39b:游龍俊之] (×)
- (e) edun -i temketu (temgetu) エ<sup>○</sup>[ツウ]ム ニ デエモケエヅウ  
[卷 3 上:9a:呉為祥] (×)
- (f) fisembuhe jukūn (jugūn) フイセエモプウ□エ チウケウム

- [卷1下:38a:彭城昌宣] (×)
- (g) yadalinkū (yadalingū) ヤアダ[sic.タ]アリインケウ  
[卷3下:29b:游龍俊之] (×)
- (h) sahalıyan malangkū (malanggū) サアハアリイヤム マアラアンケウ  
[卷5上:27a:官梅盛芳] (—)
- (i) nosigi (nosiki) ノオシイカイ [卷3上:23b: 神代定光] (○)
- (j) simari cecige (cecike) シイマアルイ ツエツイカエ  
[卷1上:36a:游龍俊之] (—)
- (k) sukiyari cecige (cecike) スウケイヤアルイ ツエツイカエ  
[卷1上:38a:游龍俊之] (—)<sup>9</sup>
- (l) kiyar gir (kir) ケイヤアレ カイレ 鷹拒人聲 [卷4下:27b:鄭永寧] (—)
- (m) kiyar gir (kir) ケイヤアレ カイレ 騷鼠等物拒人聲  
[卷4下:28a:鄭永寧] (—)
- (n) šu -i suihon -i bithe icihiyara gurun (kuren) シウ イ スウイハオム ニ ピイ  
デハエ イツイヒイヤアルア カウルウム [卷2上:43a:彭城廣林] (×)

(4a)~(4h)は「g」とすべきところを「k」と、(4i)~(4n)は「k」とすべきところを「g」と表記した例である。前者は圈点のつけ忘れだと考えられるが、(4d)~(4g)のように語積部分も間違っていれば、単なるつけ忘れとも断定できない。後者は不必要な箇所にも点をつけているので、語句の理解不足がさらに加わっている。かな表記は(4c)を除いて全てが間違った満洲語のつづりを反映している。なお、(4n)は「kuren」と「gurun」を勘違いしている。さらに興味深いのは(4n)の語積部分が「musei gurun -i geren bithei niyalmai araha irgebun uculen ucun fujurun šu fiyelen -i jergi hacin be ejeme bithe banjibume arara ba be, šu i sūihon i bithe icihiyara guren sembi.」となっている点である。語積部分では「gurun」になっていないが「kuren」にもなっていない。

(5)は「k」と「h」を混同した例である。用例は少ないが、全て「h」とすべきところを「k」と表記しているので、圈点のつけ忘れが原因だと考えられる。かな表記は全て間違った満洲語のつづり字を反映している。ただし、語積の満洲語も間違っているため、この語句そのものを誤って理解していた可能性もある。

<sup>9</sup> 「cecike」に圈点をつけて「cecige」と書いているこの2例はともに游龍俊之による訳出である。游龍俊之が翻訳を担当した残りの箇所も全て見てみたが、游龍俊之が担当した「cecike」を含む語句はこの2箇所のみであった。よって、游龍俊之は「cecike」を「cecige」と理解していた可能性がある。

(5) 「k」と「h」の混同

(a) yekere (yehere) エエケエルエ [巻1下:24b:彭城雅美] (×)

(b) kūsutulembi (hūsutulembi) ケウスウヅウレエモピイ

[巻1上:23b:神代定光] (×)

(c) hasaka (hasaha) umiyaha ハアサアケア ウミイヤアハア

[巻4上:16a:彭城永祥] (一)

(6)は「g」と「h」を混同した例である。このような例はこの一例のみである。「g」とすべきところを「h」と表記しているので、丸と点を混同したものと思われる。なお、かな表記は「ge」ならば「カエ」、「he」ならば「ハエ」となるところで、「パエ」となっている。恐らく満洲語は「he」だと理解したものと思われるが、かな表記法も逸脱した二重の誤表記例である。

(6) 「g」と「h」の混同

niyamani adahe (adage) dadage madage ニイヤアマアニイ アタアパエ タ

アタアカエ マアタアカエ [巻3上:21b:神代定光] (一)

(7)は不要な箇所「n」の左点をつけている例である。このような例はこの一例のみである。かな表記も「n」が入ったものが反映されている<sup>10</sup>。

(7) 「n」の表記 (不要な点を追加)

hojon nilha (ilha) ハオチオム ニイルハア [巻2上:20a:高尾延之] (一)

## 2.2. 子音字に関する誤り

次に、圈点の有無以外の子音字に関する満洲語の誤りの例を見てみる。まず、(8)は語末の「g」と「ng」を混同した例である。満洲文字は「ng」の「n」がない表記になっている。

---

<sup>10</sup> 「ilha」は『翻訳満語纂編』中では比較的出現頻度の高い語なので、このような誤りは或いは高尾延之が「ilha」を「nilha」と間違っ理解していた可能性を示唆するが、高尾延之が翻訳を担当した残りの箇所も全て見てみると、(7)の次の頁に当たる「巻2上:21a」にある「hohonggo moo」の語釈の部分に「ilha」が現れ、ここでは正しく「ilha」と表記されている。

(8) 音節末の「g」と「ng」の混同

edeg (edeng) エ<sup>○</sup>テエ<sup>レ</sup> [巻2 上:6b:官梅盛芳] (一)

(9)は「b」と「p」を混同した例である。字形が似ているので、混同するのも理解できる。かな表記は「バア」となっているので、子音は「p」であることを認識していたものと思われる。ただし、「pi」であれば「パイ」とすべきであり、「バア」は「pa」に対するかな表記であるため、ここでは二重の誤りとなっている。なお、語釈の満洲語は正しい表記になっている。

(9) 「b」と「p」の混同

tumen mukei tambin (tampin) ツウメエム ムウケエイ ダアモバアム  
[巻2 下:4a:神代定光] (○)

(10)は「w」と「f」を混同した例である。満洲文字の「f」の右端が突き抜けることを理解していなかったことが原因と思われる。かな表記は誤ったつづり字を反映したものになっており、さらに(10b)は語釈の満洲語も間違った表記のままになっている<sup>11</sup>。

(10) 「w」と「f」の混同

- (a) suhun fenderhen (wenderhen) スウハウム フエムテエレハエム  
[巻5 上:31a:官梅盛芳] (一)
- (b) wasilan (fasilan) ワアシイラアム [巻5 下:38b: 彭城種美] (×)

(11)と(12)は「c」と「y」、及び、「c」と「j」を混同した例である。字形が似ているので写し間違っただけと思われる。かな表記は間違っただけの満洲語を反映したものになっている。

(11) 「c」と「y」の混同

ucunggeri (yunggeri) ibereleme miyoocalambi ウツウンカエルイ イペエ  
ルエレエメエ ミイヨオウツアラアモパイ [巻3 上:15b:官梅盛芳] (○)

---

<sup>11</sup> (10b)は見出し語句全体の初頭における子音字の誤表記例である。『翻訳満語纂編』は語句を十二字頭順に並び替えているため、当然のことながらこの間違っただけの「wasilan」は当然「wa」の列に収録されている。したがって、彭城種美はこの語を完全に誤った語形として理解していたことが分かる。

(12) 「c」 と 「j」 の混同

šacingga (šajingga) karan シアツインカア ケアルアム

[卷3 上:45a:彭城廣林] (×)

(13)は「s」 と 「š」 を混同した例である。字形が似ているので、写し間違っただけと思われる。かな表記は間違っただけの満洲語を反映したものになっている。

(13) 「s」 と 「š」 の混同

yarungga muksan (mukšan) ヤ□ルウンカア ムウケサア[sic.ム]

[卷3 下:29a:游龍俊之] (—)

(14)は語末の「r」 を 「ng」 と混同した例である。字形も似ていると言えれば似ている。かな表記は間違っただけの満洲語を反映したものになっている。この例と同ページの直前には「picir seme」と「porong seme」が載っているため、「porong seme」につられて間違っただけで表記してしまったのだろうか。

(14) 「r」 と 「ng」 の混同

putung (putur) seme ブウツウン セエメエ [卷3 上:44b:穎川春重] (—)

(15)は不要な語末の「n」 を加えてしまった例である。かな表記は間違っただけの満洲語を反映したものになっているが、語積部分の満洲語は正しい表記になっている。

(15) 語末の 「n」

šatan ufan (ufa) cai シアダアム ウフアム ツアイ [卷1 上:40a:游龍俊之] (○)

### 2.3. 母音字に関する誤り

次に、圏点の有無以外の母音字に関する満洲文字の誤表記例について見てみる。まず、(16)は「a」 と 「i」 を混同した例である。左線の長さを見誤ったものと思われる。

(16) 「a」と「i」の混同

(a) midari ujui (madari uju) ミイタアルイ ウチウイ

[巻1下:12a:穎川衛香] (×)<sup>12</sup>

(b) ilan unggala mayoocan (miyoocan) イラアム ウンカアラア マアヨオウツ  
アム [巻2上:7a:官梅盛芳] (×)

(c) adunggayambi (adunggiyambi) アツウンカイヤアモピイ

[巻3上:5b:呉為祥] (×)

(16a)と(16b)のかな表記は間違った満洲語を反映したものになっているが、(16c)のかな表記は正しい満洲語を反映したものになっている<sup>13</sup>。

(17)は、字形はあまり似ていないが、「a」と「o」を混同した例である。かな表記は間違った満洲語を反映したものになっている。

(17) 「a」と「o」の混同

(a) šodambi (šodombi) シオタアモピイ [巻2上:42b:蔡正邦] (×)

(b) giyongnakū (giyangnakū) ケイヨオンナアケウ [巻5下:29b:神代延長] (×)

(18)もまた、字形はあまり似ていないが、「o」と「i」を混同した例である。上記の(16)と(17)の誤りを掛け合わせたような間違いである。かな表記は間違った満洲語を反映したものになっている。

(18) 「o」と「i」の混同

molo (moli) ilha モオロオ イルハア [巻4下:16b:彭城昌宜] (一)

(19)は二重母音の表記に関する誤りである。

(19) 二重母音の表記

doroi amba kiyao (kiyoo) トオルオ井 アモパア ケイヤアウ

[巻5下:2b:彭城昌宜] (○)

<sup>12</sup> 「midari ujui」は『清文鑑』には「madari uju」とある。つまり、「madari」の部分だけでなく「uju」の部分も違っているのだが、『翻訳満語纂編』の「midari ujui」は語釈部分でも「midari ujui」となっている。

<sup>13</sup> (16c)の語釈部分の満洲語は「atunggayambi」となっており、さらに「du」の圈点が落ちている。

ただし、(19)は完全な誤りと言えない可能性もある。語積部分も見出し語と同様に「kiyao」となっているが、「kiyoo」は明らかに漢語からの借用語であり、その漢語訳「大禮轎」の「轎」であろう。「轎」は現代の普通語では「jiào」であるから、或いは唐通事たちは当時すでに満洲語の「kiyoo」を「kiyao」と発音しており、発音通りにつづり字を書いただけなのかもしれない。

#### 2.4. 注意不足が原因と思われる誤り

次に、単なる見落としが原因だと考えられる例を挙げる。まず、(20), (21)は語句のつづり字の一部が欠如している例である。

(20) 文字の一部が欠如しているもの

- (a) ca angga (mangga) ツア マンカア [巻2下:13b:蘆塚恒徳] (○)
- (b) nomun andal (mandal) ノオムウム マムタアル  
[巻3上:23a:神代定光] (○)
- (c) muduri garudai tumin amun (lamun) suje kiru ムウツウルイ カアルウタアイ  
ツウミイム ラムウム スウチエ ケイルウ [巻1下:14a:潁川衛香] (○)
- (d) cecike fungiyeku (fulgiyeku) ツエツイケエ フウムカイエケウ  
[巻1下:27a:鉅鹿篤義] (○)
- (e) hoton mandan (mandal) ハオト[sic.ド]オム マア[以下なし]  
[巻4上:20a:高尾延之] (×)
- (f) cakūan (cakūran) ツアケウラム [巻5下:14b:彭城永祥] (ー)
- (g) dulefun sadalabure (sandalabure) durungga tetun ツウレエフウム サアタア  
ラアプウルエ ツウルウンカア デエヅウム [巻4下:9b:官梅盛芳] (×)
- (h) fishimbi (fishimbi) フイスハイモピイ [巻5下:37a:彭城種美] (○)
- (i) feniyembi (fenielembi) フエニエエエモピイ [巻5下:34b:彭城種美] (×)
- (j) [= (1c)] dahabura gisun tucimbi (tucibumbi) タアハアプウルエ カイスウム ツ  
ウツイモピイ 出具考語 [巻2上:44b:彭城廣林] (×)

(20a)と(20b)は「m」の右側のはねが欠如している例である。最後に右側のはねを足すのを忘れたのだろう。語積の満洲語は正しい表記になっている。(20c)は語頭の「l」、(20d)は語中の「l」、(20e)は語末の「l」の右側のはねが欠如している例である。「m」と同様に、最後にはねを足すのを忘れたのだろう。ただし、(20e)の語積は見出し語の誤り通りになっているので、或いは高尾延之は「mandal」を「mandan」と理解していたのかもしれない。(20f)は語中の「r」が欠如している例である。これを担当した彭城永祥はどのような書き順で「r」を

書いていたのか分からないが、結果として書き忘れた形になっている。(20g)は語中の「n」を、(20h)は語中の「i」を、(20i)は語中にある「le」を書き忘れた例である。(20j)は「tucibumbi」を「tucimbi」のように「bu」を書き忘れた例である。

(21)は「keler」が完全に欠如している例である。

(21) kalar seme (**keler** kalar seme) ケアラアルア[sic.レ] セエメエ  
[巻5上:18a:蘆塚恒徳] (○)

(21)の原因として、「keler」と「kalar」の字形が似ているから一つ書いた時点で二つ目を書くのは忘れてしまったということもありうるが、二つ目の「kalar」を書き忘れるのならまだしも、果してこのようなことがあるのだろうか。ただし、語積部分の満洲語は正しい表記になっている。(22)も(21)と類似した誤りの例である。

(22) piyas **piyas** (**pis**) seme ビイヤアス ビイヤアス セエメエ 行動輕佻  
[巻2上:31a:穎川重春] (一)

『清文鑑』には「piyas pis seme 行動輕佻」がある。これは一つ目の「piyas」を単に二つ重ねてしまったことが原因として考えられる。

(23)は不要な箇所にも音が挿入された例である。(23a)は「a」が、(23b)は「e」が、(23c)は「a」が一つ余計に書かれている。

(23) 不要な箇所にも音が挿入されているもの

(a) **ilhangga** (**ilhangga**) wehei niowarikū イラアハアンカア ワエハエ井 ニイ  
ウワアルイケウ [巻2上:7a:官梅盛芳] (一)

(b) ijin **wekejin** (**wekjin**) イチイム ワエケエチイム

[巻3上:10a:官梅盛芳] (○)<sup>14</sup>

(c) **tuluma** (**tulum**) ツ[ウ]ルウマア [巻5下:5a:彭城昌宜] (×)<sup>15</sup>

<sup>14</sup> この「wekejin」の「ke」は僅かに左側が出ているので「ke」に見えるのだが、本人は「wekjin」と理解していた可能性がある。語積部分の満洲語は正しい表記になっている。

<sup>15</sup> (23c)の語積における満洲語は肝心の最後の「ma」の部分が虫喰いになって「tulum」なのか「tuluma」なのか判別しづらくなっている。全体的な字形から判断すれば、恐らくは「tuluma」と間違った表記のままに書いていると思われる。

(24)は熟語の中に余計な属格助詞が挿入されている例である。

(24) 不要な属格助詞が挿入されているもの

fi -i kitala (fi kitala) フイ イ ケイダアラア 筆管

[巻5下:36b:彭城種美] (×)

(24)の原因は、同じ36丁裏の前後に収録している「fi -i dube フイ イ ツウブア 筆尖」、「fi -i homhon フイ イ ハオモハオム 筆帽」、「fi -i sihan フイ イ シイハアム 筆筒」が全て属格の「-i」をとっているため、その影響で(22)にも属格助詞を入れてしまったものと考えられる。一方で、以下の(25)のように必要な属格助詞が欠如している例も見られる。

(25) 必要な属格助詞が落ちているもの

sirame hafan tinggin (sirame hafan -i tinggin) シイルアメエ ハアフアム [ti  
の部分空白]ンカイム 寺丞廳 [巻2上:37b:蔡正邦] (×)

(26)は恐らく純粹に書き誤っただけと思われる例である。その証拠に語積の満洲語は正しくなっている。

(26) 純粹な書き損じと思われるもの

(a) cakūlu cecike ツアケウルウ ツエツイケエ [巻5下:13a:彭城永祥] (○)

(b) badarambungga buleku パアタアルアモプウンカア プウレエケウ

[巻1上:25b:彭城廣林] (○)

(26a)は母音「ū」の表記に関する誤りである。「ū」の母音は「o」と「i」を合わせたような文字であるが、この「i」の部分が一本多く二本書かれている。(26b)は「badarambungga」の「r」の右側に「m」を表すはねが余計についている。書き誤ったのだが修正がきかずにそのまま放置したのであろう。

## 2.5. 日本語にない音の区別ができなかったことが原因の誤り

(27)は「r」と「l」を混同して表記した例である。

(27) 「r」と「l」の混同

(a) borrori (bollori) ポオ□□ルイ [巻3上:41b:潁川春重] (×)

(b) heferi (hefeli) ハエフエルイ [卷4下:25b:鄭永寧] (×)

ひたすらに満洲文字だけを見てそれを忠実に書き写せばこのような誤りは生じないはずである。上記の2名の唐通事は、満洲語の語句を書き写す際に、その語句を知っていて、頭の中でその文字を諳んじながら書いていたものと考えられる。『翻訳満語纂編』の編纂は5年間に亘って行なわれたが、編纂に関わった唐通事のうち、5年間通して関わった者もいれば、1年或いは2年間だけといった短い期間のみ関わった者もいる。そのような中で上述の潁川春重と鄭永寧は4年間という比較的長い期間編纂に関わった人物である。またこの二人は5名いる『清文鑑和解 (翻訳清文鑑)』の編者のうちの2名でもある。唐通事の間で満洲語能力に差があったであろうことはこれまで見てきたつづり字に見られる誤表記例からも明白であるが、筆者は(27)の誤りはこの2名が満洲文字をある程度読みこなしていたからこそ逆に誤ってしまったのではないかと考えるのである。なお、(27)の例は、唐通事の母語が当然のことではあるが、日本語であったことを示している。

## 2.6. 原因不明の誤り

最後に、つづり字に見られる誤表記の原因がはっきりと特定ににくい例について挙げる。まず、(28)は「n」と「ra」を混同した例である。字形もそれほど似ているとは言い難く、その原因は不明である。

(28) 「n」と「ra」の混同

juman (jumara) チウマアム [卷3下:27a:鉅鹿篤義] (一)

(29)は間に不要な「hi」が挿入されている例である。

(29) icihiyambi (isihimbi) イツイハイヤアモピイ 抖灑

[卷5上:11a:鄭永寧] (×)

(29)の原因として、同じ「卷5下11丁表」に収録されている「icihiyambi イツイハイヤアモピイ 辦理」、icihiyambi イツイハイヤアモピイ 料理」、icihiyambi イツイハイヤアモピイ 打掃」、icihiyambi イツイハイヤアモピイ 装裹」と混同したことも考えられるが、元の『清文鑑』の中でこれらの語句が横並びになっているわけではなく、はっきりとしたことは何ともいえない。

### 3. 見出しの満洲語語句に見られる特徴

#### 3.1. 満洲語の語釈からの修正

(30) gajarci カアチアレツイ 嚮導 [巻3上:26b:石崎親之]

『清文鑑』には「yarhūdai 嚮導」がある。しかし『清文鑑』における満洲語の語釈は「ba na be takara jugūn on be sara niyalma be **gajarci** sembi」となっているため、この語釈の「gajarci」を石崎親之は見出し語にしたものと考えられる。

#### 3.2. 『清文鑑』に確認されない語句

(31) saka **bohū** サアケア ポオハウ 肉膾 [巻1上:32b:石崎親之]

『清文鑑』には「saka 肉膾」がある。また、『翻訳満語纂編』における満洲語の語釈は『清文鑑』同様に「buhū nimaha i jergi jaka i yali be forofi amtan acabufi eshun jederangge be **saka** sembi」となっている。なぜ「bohū」が追加されたのか、理由は定かでない。

(32) liy[e]liyere リイエエリ□エ□ル□ 昏迷 [巻1下:6b:穎川春重]

『清文鑑』には「liyeliyembi 昏迷」がある。また、『清文鑑』における満洲語の語釈は「largin facuhūn baita de berebufi ulhicun akū ojoro be **liveliyembi** sembi」となっているが、『翻訳満語纂編』における満洲語の語釈は「largin facuhūn baita de berabufi[sic. berebufi] ulhicun akū ojoro be, **livaliyere** sembi」で、「liyeliye-」の部分に圈点をつけ忘れていたが、語末は「-re」の形になっている。

(33) kalar seme ケアラアルア[sic.レ] セエメエ 動 [巻5上:18a:蘆塚恒徳]

『清文鑑』には「kalar seme 和藹様」がある。しかし、これは(34)の「kalar seme 動」と意味が合わない。一方で『清文鑑』には「keler kalar seme 樺子活動」もある。『清文鑑』の「keler kalar seme 樺子活動」と『翻訳満語纂編』の「kalar seme 動」は、その満洲語の語釈が共に「yaya jaka -i acabuha ba sula ofi aššara be **keler kalar** sembi」となっているため、こちらの意味で訳出したものと思われる。つづり字だけを見れば単に蘆塚恒徳が「keler」を見落とすだけという可能性もあるが、漢語部分が「動」になっていることから、唐通事たちが使用した『清

文鑑』にはこのような語句が収録されていた可能性もありうる。

#### 4. 結論

本論文では、『翻訳満語纂編』の見出し満洲語において、つづり字の誤りと、『清文鑑』と異なる語句が存在することを明らかにした。つづり字の誤りは、専ら、現在でも満洲語の初学者が犯しがちなものが多い。松岡 (2013b) では見出し満洲語の右側にふされた、満洲語の読み方 (転写) を表すかな表記について論じたことがあるが、本論文で明らかにした見出し満洲語の誤表記例は、かな表記の誤表記例とその特徴に類似する点が多い。唐通事の中には満洲語に秀でた者がいた一方で、全体的に見て、唐通事は満洲語の初学者が多かったのではないかという印象を受ける。唐通事ごとの満洲語能力についての詳細な検討は今後の課題としたい。

また、『翻訳満語纂編』の見出し満洲語に見られる『清文鑑』にない語句については、今回、その出典を明らかにできないものがある。唐通事が『翻訳満語纂編』及び『清文鑑和解 (翻訳清文鑑)』を編纂する際に使った『清文鑑』は現在のところ、同定及び発見されていないが、今後、『清文鑑』の諸版本や他の満洲語文献に現れる語句を見ていくことによって、その出典を明らかにすることもできるだろう。

#### 参考文献

- 赤峯裕子 (1989) 「〈翻刻〉『翻譯満語纂編』抄 その一」『文獻探求』 24: 57-75.  
赤峯裕子 (1990) 「〈翻刻〉『翻譯満語纂編』抄 その二」『文獻探求』 26: 55-71.  
赤峯裕子 (1991) 「〈翻刻〉『翻譯満語纂編』抄 その三」『文獻探求』 28: 72-89.  
上原久 (1971) 「長崎通事の満州語学」『言語学論叢』 11: 13-24.  
羽田亨 (編) (1937) 『満和辞典』 東京: 国書刊行会  
松岡雄太 (2013a) 「『翻訳満語纂編』と『清文鑑和解』の編纂過程」『長崎外大論叢』 17: 61-80.  
松岡雄太 (2013b) 「『翻訳満語纂編』の満洲語かな表記について」『満族史研究』 12: 27-52.  
松岡雄太 (2013c) 「『翻訳満語纂編』の語彙選抜基準」 In: Kim Juwon and Ko Dongho (eds.) *Current Trends in Altaic Linguistics (A Festschrift for Professor Emeritus Seong Baeg-in on his 80<sup>th</sup> Birthday)*, 159-202. Seoul: Altaic Society of Korea.

## On the head words of Manchu in *Honyaku Mango Sanhen*

Yuta MATSUOKA

(Nagasaki University of Foreign Studies)

This paper discusses the head words in the Manchu-Japanese dictionary, *Honyaku Manho Sanhen* 翻譯滿語纂編, edited by the Chinese translators in Nagasaki during the middle 19<sup>th</sup> century. This dictionary was made by translating Manchu words from *Yuzhi Zengding Qingwenjian* 御製增訂清文鑑, that is an original text of this dictionary, to Japanese.

In this paper, I pointed out two facts: firstly the head words of Manchu in *Honyaku Mango Sanhen* has some spelling mistakes that are also made by the beginners who presently study the Manchu language, secondly *Honyaku Mango Sanhen* has some head words that are different from the one of an original text.